

タイトル	「さぶ」考：万葉集を中心に
著者	小野寺，静子
引用	北海学園大学人文論集，35：A1-A25
発行日	2006-11-30

「さぶ」考——万葉集を中心に——

小野寺 静 子

はじめに

万葉集には「さぶ」という語が多く見い出される。「さぶ」には動詞としての「さぶ」と接尾語としての「さぶ」があり、前者には「さぶ」「うらさぶ」（七例。塙本『万葉集 訳文篇』の訓みによる。以下、万葉集の訓はこれにより、本文は『万葉集 本文篇』による）、後者には「うまひとさぶ」「おきなさぶ」「やまさぶ」「かむさぶ」など（三八例。ただし、「神び」及び「に云ふ」もそれぞれ一例と数えた）がある。古事記や日本書紀には「さぶ」の例は少なく万葉集に多例をみ、古代では「さぶ」は歌語として定着していた。

万葉集の「さぶ」は、人麻呂歌にはじまり家持歌でおわる、長い歌作の中で息づいてきた語である。多様な意味をにないな

がら万葉の歌語としてつかわれてきた。さまざまな意味をになった背景には、時代の流れによる歌の役割の変容や歌人の歌に対する姿勢の違いということがあろう。

本論では万葉集を中心に、歌における「さぶ」のさまざまな意味と変容のさまを探っていきたい。

一、古事記の「さぶ」

古代における万葉集以外で明確に「さぶ」と訓まれるものとして、古事記上巻「天の石屋」段の「勝ちさび」の例があげられる。この「勝ちさび」は、「さぶ」の初源的な意味を示していると思われるので、ここではこの例についてみていきたい。

爾くして、速須佐之男命、天照大御神に白しく、「我が心清く明きが故に、我が生める子は、手弱女を得つ。此に因りて言はば、自ら我勝ちぬ」と、云ひて、勝ちさびに、天照大御神の営田のあを放ち、其の溝を埋み、亦、其の、大嘗を聞き看す殿に屎まり散らしき(『新編古典文学全集 古事記』。以下、『古事記』の引用はこれによる)。

この「勝ちさび」の部分は原文に「勝佐備 此二字以音」とあり「勝ちさび」と訓むことは明瞭である。古事記、日本書紀を通してこのように明確な形で「さぶ」があらわれるのはこの例のみである。

この古事記の記事は、伊耶那岐命に海原を治めよと命令されたにもかかわらず、その命令に従わず根之堅州国に行くことを望んだために追放されることになった須佐之男命が、根之堅州国に行く前に姉天照大御神に申してからと、高天原の天照大御神を訪れた時のことを述べた部分である。「善心」からの来訪ではないだろうという天照大御神の疑いをはらすために行われた「うけひ」によって、須佐之男命が女神を得、「自ら我勝ちぬ」と、「勝ちさびに」行動する。「勝ちさび」の「さぶ」は、『古事記伝』に「師説に」として「進むことを須佐備と云、又それを約

て佐備とも云り、今此神誓に勝給る御心の進める勢に荒び給ふを勝佐備と云て、進み荒ぶる意なり」(『本居宣長全集』第九巻)とある。また、西郷信綱氏は「サブは、ある状態がとめどなく荒れ進むことをいう。……いい方でなく凶と荒の方に進む」(『古事記注釈』第一巻、一九七五年一月)、あるいは「勝ちさび」は勝ちらしい振舞をすること(倉野憲司『古事記全註釈』第三巻、昭和五十一年六月)、「勝ちに乗じる」(新編全集『古事記』)などと解される。スサブという語と同源で、そこから「荒ぶる」という意味を持つと解されるのであり、「さぶ」の本来の意味にはそうした意味を内包している。

古事記の「さぶ」の唯一例が、「勝つ」という語を冠していることは、「勝つ」という語に連なるにふさわしい語であつたことを示すものであろう。しかし須佐之男命の「清明」心が証明された——須佐之男命が勝った——のならば、何故、「天照大御神の営田のあを放ち、其の溝を埋み…」という、天照大御神の天の石屋ごもりを引き起こす乱暴な行動を須佐之男命はしたのであろうか。「うけひ」は前提となる言立てのもとになされる呪術と認められるが、古事記には前提となる言立てはないまま「うけひ」がなされている。「うけひ」の結果、「手弱女を得つ。此に因りて言はば、自ら我勝ちぬ」とあつて、「手弱女を得」たこ

とが勝ちになる、ということを示してはいる。前提となる言立
てを持たない古事記では、須佐之男命自身の言挙げとその後の
行動の「勝ちさび」という表現によってしか、勝ちが証明され
ない。須佐之男命が「うけひ」で勝ち清明心が証明されること
は記紀の伝承で一致しているとの見解から、須佐之男命の勝ち
は自明のこと（戸谷高明「二神の『うけひ』神話——記紀にお
ける原伝の問題——」『学術研究』一三、昭和三九年一二月。西
郷信綱『古事記注釈』）であると読まれてきた。しかし古事記に
は「勝ちさび」以外に須佐之男命が勝ったということは明確に
示されていず、日本書紀本文でも（第六段）生まれた子が女な
らば濁心、男ならば清心という言葉挙げのもとに「うけひ」が行
われるが、「物実」の所有者を探求するという手順をへて勝ちが
決められている。

このことから、むしろ日本書紀本文では「スサノヲはウケヒ
に負けたのではないか」、古事記は前提となる言立てを持たない
「うけひ」であるから「勝ち負けを判定することは不可能」で、
「スサノヲはウケヒに負けたと語っていると読みとるべきでは
ないか」という見解（三浦祐之「へ語り」その表現と構造——『ウ
ケヒ神話』を通して——）『上代文学』四九、昭和五七年一月）
や、日本書紀は男神を生んで勝ちになるのであり、古事記の神

話と日本書紀の神話を統一体として読むならば、古事記の女神
の誕生が清明心の証明にはならず、古事記の須佐之男命の「勝
利は神意の裏づけをもたぬ自らの主体において宣言したものに
すぎない」（森昌文「追放されるスサノヲ像——「清明心」から
の乖離」『国文学研究』一〇〇、平成二年三月）という読みも提
示され、「どちらが勝ったかというような、勝負を問題とする読
み方は正しくない」（新編全集）という見解も出されるようにな
る。森昌文氏は、『勝佐備』の語で重みをもつのは、『勝』でな
く『佐備』の方にあるはずだ」と述べ、万葉集卷十八・四一三
三歌の「翁さびせむ」は「翁」でない池主が翁らしくふる舞う
意としてあった（前掲論）と述べる。

確かにこの後に続く須佐之男命の暴行は、天つ罪といわれる
行動、天照大御神の天の石屋ごもりを引き起こすほどのもので、
「さぶ」から引き起こされるものにはすぎまいものがあり、清
明心が証明されたのに何故そのような行動を起こさなければな
らないのか理解しがたい。しかし、生まれた子が、自分の子か
天照大御神の子かの所属を決めたあと、須佐之男命が「自ら我
勝ちぬ」と宣言し、「勝ちさびに」行われた行動があることから
考えると、「勝ちさびに」の「勝ち」は無視できないであろう。
古事記の「さぶ」が、記紀を通してあらわれる唯一の例で、そ

ここに初源的な「さぶ」の意味があると考え、¹「さぶ」は「勝つ」というような語と結び付く性格をもつものであることを示しているといえる。「さぶ」は本来、勝者に許される行動で、勝者が荒々しくすぎましいほどであることをいうのだろう。さうした意味をもつ古事記の「さぶ」は、「さぶ」の初源的な意味をあらわすものだと考える。

二、用字から見た「さぶ」の義

万葉集の「さぶ」の表記は「佐夫」「佐扶」「左夫」「佐備」「左備」「佐飛」という仮名書表記が大半を占めるが、意義を持たせた表記としては、「不_レ楽」(二・二二〇)「不_レ怜」(二・二二三)が各一例ある。「さぶ」と同源の「さぶし」「さびし」の用字も、万葉集では仮名書き例以外は「不_レ楽」(三・二五七、四・五七六、十六・三八六三)、「不_レ怜」(二・二二八、三・四三四、十・二二九〇、十二・二九一四、十三・三二二六、十九・四一七七、四一七八)である。また、「神」(四・五二二)、「神成」(十一・二四一七)、「神古」(十二・二八六三)も「かむさぶ」と訓まれている。ただ、「神」を「かむさぶ」と訓むのは代匠記(初)に始まり、古くは「メツラシケム」と訓まれていた。「神成」「神

古」も「かむさぶ」と訓むのは古義に始まり、古くは「カミトナル」「カミナレヤ」などと訓まれ、古くから「かむさぶ」と訓まれていたわけではない。

万葉集の用字から「さぶ」を考えるのには、「不_レ楽」「不_レ怜」「神」「神成」「神古」の意味を考えるとという方法がある。まず「楽」であるが、『類聚名義抄』に「タノシビ、ウツクシブ」など、『新撰字鏡』に「タノシブ、ヨロコブ」などの訓がある。

「怜」は万葉集の文中(左注、書簡、七言詩)、「怜_レ旧」(「旧りぬるをあはれびて」、三・二六〇左注)とあり、奈良遷都後の香具山をなつかしむ情を表現する場合に用いられている。「暮春風景最可_レ怜」(「暮春の風景最も怜れぶ可し」、十七・三九六七書簡)は、病床にある越中守家持に越中掾池主が贈った書簡中のもので、三月の景は格別に趣深いことの表現としてある。また「可_レ怜之意不_レ能_二黙止_一」(「可_レ怜の意黙止ること能はず」、十八・四一二八書簡)は、掾池主が守家持に送った書簡中のもので、依頼の品がすり替えられたことを面白さに黙っておれませんが、といったものである。他には「怜_二惜不_レ厭_二之帰_一」(「厭かぬ帰りを怜し惜しみ」、六・一〇〇四左注)、「餘春媚日宜_二怜賞_一」(「余春の媚日は怜賞するに足る」、十七・三九七三詩)、「悲_二怜物色変化_一」(「物色の変化ふことを悲しび怜びて」、二十・四四

八四左注)は共に「憐」に同じであわれむの意である。

歌語中の「怜」は「何」を伴い「何怜」としてみえる。稿本では「何怜」を感動詞の「あはれ」として訓む場合と形容詞「おもしろし」として訓む場合とがある。感動詞「あはれ」は、「この旅人何怜」(三・四一五)、「我が子は何怜」(四・七六一)、「あな何怜」(六・一〇五〇)、「何怜その鹿子」(六・一四一七)、「黄葉何怜と」(七・一四〇九)、「何怜その鳥」(九・一七五六)、「何怜我妹が」(十一・二五九四)、「何怜と君を」(十二・三一九七)があり、哀傷、哀憐の意で用いられる。形容詞「おもしろし」の場合は「かく何怜縫へる袋」(四・七四六)、「夜渡る月を何怜」(七・一〇八一)で、すばらしいと思う、晴れ晴れとする気持を表すものとして用いられている。

万葉集の「さぶ」「さぶし」の用字からその意味を考えると、楽しい、趣がある、哀憐、晴れ晴れとした、そういったものの否定ということになる。

「神」(四・五二二)、「神成」(十一・二四一七)、「神成」(十二・二八六三)の用字からは「神さぶ」が神そのものを神さぶると捉えていたことになる。

日本書紀には仮名書による「さぶ」の例は認められず、記紀ともに「不_レ楽」、「不_レ怜」で「さぶ」と訓む例はない(『古事記

総索引』、『日本書紀総索引 漢字語彙篇』中村啓信編、昭和三九(四三三)のみならず「さぶ」という語自体、古事記の「勝ちさび」以外、記紀には認められないようである。但し、継体紀八年三月の「暴虐奢侈」は、「シヒワサシオゴリスサビシ」(『新訂増補 国史大系 日本書紀 後編』)「しひわざしおごりすさびし」(『日本古典文学大系 古事記祝詞』)のように「奢侈」を「すさび」と訓まれたのによれば、日本書紀に「さぶ」と同源の語である「すさび」の例は認められるということになる。が、「奢侈」は「すさび」を定訓としているわけではなく、「ワサオコリ」(『書紀集解 三』)のように「おごり」と訓まれてもきた。確かに「奢侈」という語には意味の上で「すさぶ」という語に通じるところがあるが、「奢侈」で荒れすさぶの意味として「すさぶ」と訓まれたかは疑わしい。『文選』の「欲_レ以_二奢侈_一相勝、荒淫相越_と」(奢侈を以て相勝ち、荒淫をもつて相越えんと欲す。「上林賦」『新釈漢文大系 文選(賦篇)中』)などの例から考えると、新編古典全集の訓みのように「しゃし」と音読し、贅沢の意ととって良いのだろう。

古事記には「怜」はない(『古事記総索引 漢字索引』による)が、日本書紀には「可怜」、「何怜」の例がある。「可怜」の初出である「可怜、此云_二麻師_一」(神代上 海幸・山幸の段)は、「可

「怜」で「うまし」と訓むことが示されている。彦火火出見尊が塩土老翁によって至り着いた浜を形容するもので、美しい、感動的なという意である。「可怜」は同段の第一、第三(但し「可怜御路」、第四にも同様な意で、他には、天照大神がはじめて天から降臨した所としての伊勢の国の讚美表現として、「傍国の可怜国なり」(垂仁二年三月)とあり、清寧天皇の琴の音に合わせて詠んだ歌に対する讃めことばとして「可怜」とある(顕宗即位前紀)。「可怜」は、仁賢六年秋「若草の、吾が夫何怜」とあり「言吾夫何怜矣、此云阿我因摩播耶」と「はや」と読むことが示され、感動詞として用いられている。

古事記に「神成」の例はあるが「カミトナリ」と訓まれている。が、万葉集に「神成」で「神さぶ」と訓むことを考えると「神さぶ」と訓める可能性はある。

三、動詞としての「さぶ」

「さぶ」は古代の文献中、万葉集にずば抜けて多い。その例の多くが名詞や活用語を冠して用いられるものである。動詞として単独に「さぶ」とあるのは一例のみで、「うら」を伴う「うらさぶ」が六例で、全体に動詞としての「さぶ」の例は少ない。

まず「うらさぶ」から考える。「うらさぶ」「うらさびくらす」は挽歌に用いられることが多い。

天皇の崩りましす時に、大后の作らす歌一首

……その山を 振り放け見つつ 夕されば あやに哀しみ
明け来れば うらさび暮らし あらたへの 衣の袖は 乾
る時もなし (二・一五九)

柿本朝臣人麻呂、妻の死にし後に、泣血哀慟して作

る歌二首 并せて短歌

……我妹子が 形見に置ける みどり子の 乞ひ泣くごと
に 取り与ふる ものしなれば 男じもの わきばさみ
持ち 我妹子と 二人我が寝し 枕づく つま屋のうちに
昼はも うらさび暮らし 夜はも 息づき明かし……

(二・二二〇)

或本の歌に曰く

……我妹子が 形見に置ける みどり子の 乞ひ泣くごと
に 取り委す 男じもの わきばさみ持ち 我妹子と 二
人我が寝し 枕づく つま屋のうちに 昼は うらさび暮
らし 夜は息づき明かし…… (二・二二三)

挽歌一首 并せて短歌

……玉梓の 道来る人の 伝言に 我に語らく はしきよし
君はこのころ うらさびて 嘆かひいます 世間の
憂けく辛けく 咲く花も 時にうつろひ うつせみも 常
なくありけり…… (十九・四二一四)

一五九歌はむしろに哀しいので「うらさび暮ら」すのであり、哀しい感情が「さぶ」という感情を誘発させる。天武天皇崩後、大后の哀しいので心寂しく暮らす、心がすさんでゆくことを「うらさぶ」と表現したものであろう。

二二〇、二二三歌は人麻呂による挽歌で、妻を亡くした後、日中しよんぼりと荒廃した気持ちで過ごすさまを「うらさび暮らし」と、歌っている。四二一四歌は、家持が聶の藤原継縄が母を喪つて悲しんでいると聞いて弔問した歌で、使者によつて伝えられた継縄の嘆くさまとして使われている。このように「うらさぶ」は挽歌における、死者の妻や子にあたる者の嘆きのさまを表すものとして使われる。

高市古人、近江の旧き堵を感傷して作る歌 或書は云
はく高市連黒人なりといふ

楽波の 国つ御神の うらさびて 荒れたる京 見れば

悲しも (一・三三)

近江旧堵の土地の神は「うらさびて」、「荒れたる」と荒涼とした京、すさんだ様を「うらさびて」と詠んでいる。「うらさぶ」は他に、

和銅五年壬子の夏四月、長田王を伊勢の斎宮に遣はす時に、山辺の御井にして作る歌

うらさぶる 心さまねし ひしかたの 天のしぐれの 流れあふ見れば (一・八二)

がある。同題詞のもとに八一〜八三歌の三首が収められるが、八一〜八三歌に対しては左注に「右の二首は、今案ふるに、御井にして作るに似ず。けだし、当時に誦める古歌か」とあつて、八一歌の「山辺の 御井を見がてり 神風の 伊勢娘子ども 相見つるかも」の、山辺御井で伊勢娘子たちに逢つた四月の浮き立つような雰囲気はない。時雨が流れるように降り乱れているさまによつて起こされた寂しい感情で、新しい叙情の表現となっている。

「さぶ」が単独で動詞として用いられる、

大宰帥大伴卿の京に上りし後に、沙弥満誓、卿に贈る歌二首

まそ鏡 見飽かぬ君に 後れてや 朝夕に さびつつ居らむ (四・五七二)

もこの系統を継ぐものである。これは旅人が太宰帥の任がとけ上京した後に、沙弥満誓が「見飽かぬ君」に取り残された自分の状況を「さびつつ居らむ」と歌ったものである。見飽きることのない君と共にいた満足感とは対照的に、楽しまずささんでゆく心を表現したものである。動詞「さぶ」は、喪失感と結び付いた寂しさや荒涼感、すさんだ気持をあらわす語としてある。

四、体言を冠する「さぶ」

多くは名詞を冠する接尾語としてのもので、「やまさぶ」「うまひとさぶ」「おきなさぶ」「をとこさぶ」「をとめさぶ」(以上、各一例)があり、「山さぶ」を除き、人間にかかわる語である。また「しみさび」は「しむ」の体言「しみ」に接尾語「さぶ」が接続したものと考える。

久米禪師、石川郎女を娉ふ時の歌五首

みこも刈る 信濃の真弓 我が引かば うま人さびて 否
と言はむかも 禪師 (二・九六)

世間の住み難きことを哀しぶる歌一首 并せて序

……娘子らが 娘子さびすと 韓玉を 手本に巻かし 或
はこの句あり、云はく「白たへの 袖振りかはし 紅の 赤裳裾引き」
よち子らと 手携はりて 遊びけむ 時の盛りを 留みか
ね 過ぐし遣りつれ……ますらをの 男さびすと 剣大刀
腰に取り佩き さつ弓を 手握り持ちて 赤駒に 倭文鞍
うち置き 這ひ乗りて 遊びあるきし…… (五・八〇四)

神亀五年七月二十一日に、嘉摩郡にして撰定す。 筑前国守

山上憶良

別に奉る 云々 歌二首

針袋 これは賜りぬ すり袋 今は得てしか 翁さびけむ

(十八・四一三三)

九六歌は天智天皇代に収められるもので、久米禪師が石川郎女に求婚した時の歌として伝える五首中の最初の歌である。久米禪師が石川郎女に対して、わたしがあなたの気を引いたらあなたは「うま人さびて」いやと言われるであろうかという歌で

ある。「郎女」は「奈良時代以前では石川・大伴・巨勢・藤原の四氏に限って用いており、権門の出の女性であることを示す」(新編全集)から、石川郎女はまさに「うま入」すなわち貴人そのものである。「うま入さびて」は石川郎女が貴人である、という捉え方があつてますますその度合いがまし、わたしの求婚にいやと言われるのだろうか、と送りやつたもので、「うま入さびて」は石川郎女が貴人であることを肯定した上でますますそう振る舞うということを示している。

八〇四歌は山上憶良の嘉摩郡での作で、「娘子らが 娘子さびす、は「ますらをの 男さびす」は、娘子である者らが「娘子さびす」であり、ますらをが「男さびす」であり、「娘子」「男」であることが前提となつての表現である。

四一三三歌は天平勝宝元年十二月、越前掾大伴池主が越中守家持に送つたものである。当時家持は三三才、池主は三五、六才ほどと考えられが、今の年齢感覚と異なるとはいえ池主は翁というのはふさわしくない。翁でないものが「翁さぶ」と歌っているのは、これまで述べてきた「さぶ」の用法とは異なる。ただし、この歌の成立にはいきさつがあり、そのあたりの考慮が必要であろう。天平勝宝元年十一月十二日、池主から家持に訴状の形をとつた書状と戯歌四首(十八・四二二八〜四二二二)

が贈られる。それによれば、かねて家持にお願いしていた物とは別物が届けられたため(その中に「針袋」があった)、戯れ心によつて司法検査の長官でもある家持に池主が訴状形式の書簡を送つてきたのである。戯歌四首中に、

草枕 旅の翁と 思ほして 針そ賜へる 縫はむ物もが
(十八・四二二八)

というのがあり、針袋を送つてきた家持に対して、わたしを旅の翁とお思ひになつて針までくださったと、皮肉っている。池主を翁というのは誇張したたわむれの心からであるのだろう。

四一三三歌はこの池主の書状と歌に対しての家持の返歌(「返報歌は、脱漏し探り求むること得ず」とあり、万葉集には残さない)に応え、池主が家持に贈つたものである。家持は池主を「旅の翁」として贈り物をしたのであるから、池主は家持によつて翁とされている。針袋を頂戴したがすり袋があれば更に翁らしくなるでしょう、というのは家持は池主を翁と思つていふということ的前提にしたものである。翁とされる池主が「翁さぶ」と歌うのだから、「翁さぶ」は翁であるものがいつそうそのようになるといふ意味になる。

これらの「さぶ」は、「うま人」が「うま人さびて」であり、「娘子ら」が「娘子さびす」のであり、「ますらを」が「男さびす」のであり、家持が翁と想っている池主が「翁さぶ」のである。これらの「さぶ」に体言を冠する例は、体言に相当するものがますますそれらしくなる、その勢いがますますという意味で用いられるもので、古事記や動詞としての「さぶ」や万葉集の「さぶ」の用字のもつ、「さぶ」本来の荒々しく、好ましいとはいえない状況の表現として用いられてきたのとは別の意味での勢いを示す表現として用いられている。こうした「さぶ」の用法の変化は「藤原宮の御井の歌」に見いだされるといってよいだろう。「藤原宮の御井の歌」には、「しみさぶ」「山さぶ」「神さぶ」合わせて三例の「さぶ」がある。

藤原宮の御井の歌

やすみしし わご大君 高照らす 日の皇子 荒たへの
藤井が原に 大御門 始めたまひて 埴安の 堤の上に
あり立たし 見たたまへば 大和の 青香具山は 日の経
の 大さ御門に 春山と しみさび立てり 畝傍の この
瑞山は 日の緯の 大さ御門に 瑞山と 山さびいます
耳梨の 青菅山は 背面の 大さ御門に 宜しなへ 神さ

び立てり 名ぐはしき 吉野の山は 影面の 大さ御門ゆ
雲居にそ 遠くありける 高知るや 天の御陰 天知るや
日の御陰の 水こそば 常にあらめ 御井の清水

(一・五二)

短歌

藤原の 大宮仕へ 生れつくや 娘子がともは ともしき
ろかも (一・五三)

右の歌、作者未だ詳らかならず。

この長短歌の作歌時について万葉集には「藤原宮に天下治めたまふ天皇の代」以外の記述はないが、持統八年二月六日の藤原京遷都から間もない時期——「春山」とあるところから九年春か——に作られたもので、遷都「以後も引き続き造営された新都藤原宮の永遠の繁栄を、宮所の清泉によせて寿いだ儀礼歌、寿歌」(都倉義孝「藤原宮御井の歌」『万葉集を学ぶ 第一集』昭和五二年十二月)といえよう。

「しみさびたてり」の「さぶ」は繁茂するの意の「しむ」の体言「しみ」に接続し、繁茂の状況がいつそうすすんでゆくことを歌ったもので、藤原の宮の東面の大御門に青々と茂る香具山の豊かさを讃える。「山さびいます」は畝傍山が西面の大御門に

瑞々しい山として山らしくあることを歌い、「神さび立てり」は耳梨山が北面の大御門に格好よく神々しく立っていることを歌っている。藤原宮の東、西、後方にある大和三山の、木々の茂り、山らしくあり、神々しくあることを歌うことによって、新宮藤原宮を讃える。藤原京の造営計画については、天武一三年三月九日の「天皇、京師に巡行りたまひて、宮室之地を定めたまふ」の「宮室之地」が藤原宮のこととする見解が出されているように(岸俊男『日本の古代宮都』一九九三年五月)、藤原京は天武天皇によって決定され持統天皇によって完成された、日本最初の本格的な都城である。後の平城京選定については、「方に今、平城の地、四禽図に叶い、三山鎮を作し、龜筮並に従ふ。都邑を建つべし」(『続日本紀』、和銅元年二月一五日。『続日本紀』は『新日本古典文学大系』による。以下、『続日本紀』の引用はこれによる)と、場所の選定にあたって都邑を建てるべき地の条件が示されている。藤原京についてはその選定時についての記述はないが、文武元年正月一日元日朝賀の際の記事中に、

左は日像・青竜・朱雀の幡、右は月像・玄武・白虎の幡なり。

とあり、平城の地の「四禽図に叶」った、東は青竜、南は朱雀、西は白虎、北は玄武に対応するものであり、平城京の「三山鎮を作し」(東の春日山、北の奈良山、西の生駒山)は、藤原京の東の香久山、北の畝傍山、西の耳成山に対応する。藤原京の選定も平城京のそれと同じく「龜筮」に従ったものといえる。「さぶ」は、

大和の 青香具山は 日の経の 大き御門に

春山と しみさび立てり

畝傍の この瑞山は 日の緯の 大き御門に

瑞山と 山さびいます

耳梨の 青菅山は 背面の 大き御門に

宜しなへ 神さび立てり

と、まさに藤原京の「三山鎮を作」す山の讃美表現として用いられている。ただ、この「藤原宮の御井の歌」には「名ぐはしき 吉野の山は 影面の 大き御門ゆ 雲居にそ 遠くありける」と、藤原京の南に位置する吉野の山も歌われている。そこに「作者が、東に香久山、西に畝傍山、北に耳成山、南に吉野の山々を配して一首を結構したことの背景には、ここにあげた

(注『周礼』、『春秋左氏伝』)中国古代の『四鎮』『四嶽』の思想、とりわけ四嶽の思想が存在していたのである」(吉田義孝「柿本人麻呂における持統朝」『柿本人麻呂とその時代』昭和六一年三月。初出昭和五七年)と、四山に囲まれたものとしてみることもできる。が大和三山が藤原京に隣接、あるいは内包する山として全て「さぶ」で表現されているのに対して、「名ぐはしき……雲居にそ 遠くありける」とある吉野山とは、城崎陽子氏が吉野山を他の三山と区別した表現であるとするように(『藤原宮御井歌——発想の源泉をめぐって——』『美夫君志』四三号 平成三年一〇月)、異質である(ただし、城崎氏の論は吉野という地に「御井の清水」を詠いださせる要因をさぐったものである)。香具山に対する「しみさび立てり」、畝傍山に対する「山さびいます」、耳梨山に対する「神さび立てり」はそれぞれ繁茂しているさま、山らしくあるさま、神らしくあるさまのますます盛んであることを歌うことによって、それらの山々に囲まれた藤原宮を言祝ぐ、藤原宮の御井の讃美表現としての働きをなす語として重要な役割を担っている。藤原宮時代あたりを境に「さぶ」が宮廷儀礼歌における讃美表現としての意味をもつようになつたことを、この歌は示している。

五、「神さぶ」

「さぶ」が藤原宮遷都後、宮廷儀礼歌における讃美表現としての意義を担うようになったと考えられるが、「神さぶ」に関しては「藤原宮の御井の歌」以前に讃美表現として用いられている。万葉集中に「神さぶ」は「カムサブ」として三〇例(「一に云ふ」を含む)、「カムブ」として二例みえる。「さぶ」は「神さぶ」として歌に多用されてきたといえる。この「カムサブ」と「カムブ」について古い例から見ていきたい。まず挙げられるのが、

吉野宮に幸す時に、柿本朝臣人麻呂の作る歌

やすみしし 我が大君 神ながら 神さびせすと 吉野川
激つ河内に 高殿を 高知りまして 登り立ち 国見をせ
せば……(一・三八)

である。この歌は持統天皇による吉野行幸に際しての詠であるが、作歌年時については不明である。配列順から考えれば「藤原宮の御井の歌」より前と考えられ、「神さぶ」の集中における初出例といえる。また「神ながら 神さびせす」と、「神ながら」を伴って歌われる最初の例でもある。ここで「神ながら 神さ

びせず」のは「我が大君」すなわち持統天皇である。天皇を神とするのは、

壬申の年の乱の平定まりにし以後の歌二首

大君は 神にしませば 赤駒の 腹這ふ田居を 都と成し
つ (十九・四二六〇)

右の一首、大將軍贈右大臣大伴卿作る。

大君は 神にしませば 水鳥の 集く水沼を 都と成しつ

作者未だ詳らかならず (十九・四二六一)

右の件の二首、天平勝宝四年二月二日に聞き、即ちここに載す。

に「大君は 神にしませば」とあり、壬申の乱平定後の天武天皇に対していう。「大君は 神にしませば」は集中に他に三例みえるが、人麻呂によるのは二首である。

天皇、雷の岡に出でます時に、柿本朝臣人麻呂の作る歌一首

大君は 神にしませば 天雲の 雷の上に 廬りせるかも

(三・二二三五)

右、或本に云はく、忍壁皇子に献れるなりといふ。その歌に曰く、「大君は 神にしませば 雲隠る 雷山に 宮敷きいます」

長皇子、狝路の池に出でます時に、柿本朝臣人麻呂の作る歌一首 并せて短歌

或本の反歌一首

大君は 神にしませば 真木の立つ 荒山中に 海をなすかも (三・二四一)

二三五歌の「天皇」はどの天皇をさすのか明記がなく、天武天皇とも持統天皇とも考えられるが、人麻呂の歌人として活躍した時期を考えると、持統天皇と考えてよいだろう。天武天皇としても、壬申の乱平定後の歌である四二六〇～四二六一歌より遅れることは間違いない。「大君は 神にしませば」の歌句は、人麻呂以前に成立していたことになる。二四一歌は同じく持統代の歌で、長皇子による狝路の池での狩場で人麻呂が長皇子に献じたものである。長歌の「やすみしし 我が大君 高光る 我が日の皇子」を受けて反歌で「大君は 神にしませば」と歌っている。天皇のみならず、天武直系の皇子に対しても「大君は 神にしませば」と詠んでいる。神野志隆光氏は、「大君は 神に

しませば」の表現は、

「うつせみ」の人ならざるごとくだという驚嘆を、「神」をもちだして、「おほきみ」(「うつせみ」の側のもの)と「神」という、本来つながらないものをつないで、「大王は神にしませば」という表現にしてみせたのだと考える。

(『神にしませば』と『神ながら』 『柿本人麻呂研究』

一九九二年四月。初出一九九〇年)

とし、このようななかから新しい表現の質を獲得したのが二三五歌であると述べる。すでに吉井巖氏も人麻呂が「天雲の雷」と歌った場合、「そこに言語による神話的世界を具現させようとしていた姿勢」があると述べるように、二三五歌の「大君は 神にしませば」は、巻十九の歌とは質を異にする神話的世界の具現を認めるべきなのであろう。吉井氏はさらに二三五歌の神話的世界の具現は、「吉野における天皇讃歌で、人麻呂が、山の神や河の神の奉仕を受けて国見する天皇を歌いあげた、その発想と基本的には同質」(『雷岳の歌』『万葉集を学ぶ』第三集、昭和五三年三月)とする。人麻呂の吉野讃歌における「神ながら 神さびせす」は、四二六〇〜四二六一歌の「大君は 神にしませ

ば」を神話的世界を具現させ、「神ながら」という表現を生み出したものと考えてよいのだろう。

三八歌は、「神ながら 神さびせす」として歌われる。「神ながら 神さびせす」について根来麻子氏は、『神ながら』は主語の内面に主眼をおいて神であることに言及する語なのであり、『神さび』は主体の外面に主眼をおいてその神らしさを認識しようとする例で、人麻呂によって「現存するオホキミに対して内面からも外面からも『神』という属性を与える讃辞として機能させた」表現(「神ながら 神さびせす」考——表現意識と機能、万葉集における位置づけをめぐって——『万葉語文研究』第二集 二〇〇六年三月)ととらえる。「神ながら 神さびせす」としてあらわれる場合には、そうした二重性という方法で讃辞するということになるのだろう。

「神ながら 神さびせす」は他にも、

軽皇子、安騎の野に宿る時に、柿本朝臣人麻呂の作る歌

やすみしし 我が大君 高照らす 日の皇子 神ながら
神さびせすと 太しかす 京を置きて こもりくの 泊瀬
の山は 真木立つ 荒き山路を 岩が根 禁樹押しなべ

坂鳥の 朝越えまして…… (一・四五)

と人麻呂作にみえ、「我が大君」・「日の皇子」に対する人麻呂独自の讃辞表現といえる。「神ながら 神さびせす」は、神話的世界を具現させ持統天皇や軽皇子をはじめとする皇子の内面からも外面からも讃える讃美表現として生み出された。万葉集中には、これらの歌を踏襲した山上憶良の「鎮懷石歌」に、

かけまくは あやに恐し 足日女 神の尊 ……万代に 言
ひ継ぐがねと 海の底 沖つ深江の 海上の 子負の原に
御手づから 置かしたまひて 神ながら 神さびいます
奇し御魂 今の現に 尊きろかむ (五・八一三)

がある。また「神ながら」をともなわないが「神さぶ」と詠み、「神ながら 神さびせす」と同様な意義をもつものも人麻呂作などにある。

高市皇子尊の城上の嬪宮の時に、柿本朝臣人麻呂の
作る歌一首 并せて短歌

かけまくも ゆゆしきかも 一に云ふ「ゆゆしけれども」

言はまくも あやに恐き 明日香の 真神の原に ひさか
たの 天つ御門を 恐くも 定めたまひて 神さぶと 岩
隠ります…… (二・一九九)

石田王の卒る時に、丹生王の作る歌一首 并せて短歌
なゆ竹の とをよる御子 さにつらふ 我が大君は こ
もりくの 泊瀬の山に 神さびに 斎きいますと……

(三・四二〇)

一九九歌は持統一〇年七月没の高市皇子の挽歌で、「神さぶ」は天武天皇の崩御を神らしい振る舞いとして歌ったものである。四二〇歌はこのような人麻呂歌を引き継ぐもので、石田王の死去を神らしく振る舞うこととして歌っている。これらは「神ながら 神さびいます」と同じく神話的な世界の具現化による表現といえる。おそらく「神さぶ」は古事記の「勝さぶ」を受け継ぐ語で、神として人知を越えたすさまじさをこめた表現なのであろう。

人麻呂の「(神ながら) 神さぶ」は天皇をはじめとする皇孫に対する表現であるが、「神さぶ」が土地讃美表現として用いられるのは五二歌にはじまるといつてよい。この系統を引くものは以下のごとくである。

まず、行幸における歌があげられる。

八年丙子の夏六月、吉野の離宮に幸す時に、山部宿祢赤人、詔に応へて、作る歌一首 并せて短歌

やすみしし 我が大君の 見したまふ 吉野の宮は 山高
み 雲そたなびく 山速み 瀬の音そ清き 神さびて 見
れば貴く 宜しなへ 見ればさやけし……

(六・一〇〇五)

山部宿祢赤人、伊予の温泉に至りて作る歌一首 并せて短歌

……伊予の高嶺の 射狭庭の 岡に立たして 歌思ひ 辞
思ほしし み湯の上の 木群を見れば 臣の木も 生ひ継
ぎにけり 鳴く鳥の 声も変はらず 遠き代に 神さび行
かむ 行幸処(三・三二二)

一〇〇五歌は天平八年、聖武天皇によって行われた行幸の際の応詔歌で、吉野の宮を讃える表現として用いられている。「神さびて 見れば貴く」とあるように、神さびているさまは見れば貴いのである。三二二歌は昔の行幸地である伊予の温泉を遠い将来までも「神さぶ」ゆくであろうことを歌ったものである。

このように「神さぶ」は行幸地を讃美する表現として定着をみる。次の歌群は任務によって都を離れての歌である。

長田王、筑紫に遣はされて、水嶋に渡る時の歌二首
聞きしごと まこと尊く 奇しくも 神さび居るか これ
の水島(三・二四五)

能登郡にして香島の津より船を発し、熊来村をさして往く時に作る歌二首

とぶさ立て 舟木伐るといふ 能登の島山 今日見れば
木立繁しも 幾代神びそ(十七・四〇二六)

季春三月九日に出挙の政に擬りて、旧江村に行く。

道の上に物花を属目する詠并せて興中に作る所の歌
洪谿の崎に過り、巖の上の樹を見る歌一首

磯の上の つままを見れば 根を延へて 年深からし 神
さびにけり(十九・四一五九)

(防人歌)

難波津を 漕ぎ出て見れば 神さぶる 生駒高嶺に 雲そ
たなびく(二十・四三八〇)

右の一首、梁田郡の上丁大田部三成

二四五歌は長田王が筑紫に遣わされた時の歌というが、長田王は靈龜二年一〇月近江守になったのをはじめとする職歴はみえるが、筑紫に遣わされた記事はみえない（『続日本紀』）。靈龜二年以前のことであろうか。「神さび居る」は「まこと尊く 奇しく」ある「水島」の光景を讃える。「聞きしごと」は、景行天皇が一八年四月熊本県葦北の小島に泊り食事をされた折、島内に水がなく途方にくれた山部阿弭古の祖小左が天を仰いで天神地祇に祈ったところ清水が湧き出たのでそれを献上し、その島を水島と名付けたという故事を聞いたというもので、人力では及ばない天神地祇の威力によって湧き出た清水の尊く神秘的な様を「神さび居る」と表現している。四〇二六、四一五九歌はともに家持の越中守時代のもので、出挙により国府から離れての歌である。

また、以下は旅の理由ははっきりしないが、おそらく任務によつての旅、遊覧を目的に訪れた時の歌である。

山部宿祢赤人、富士の山を望む歌一首 并せて短歌
天地の 分れし時ゆ 神さびて 高く貴き 駿河なる 富
士の高嶺を 天の原 振り放け見れば……（三・三一七）

吉野にして作る

神さぶる 岩根ごしき み吉野の 水分山を 見れば悲しも（七・一一三〇）

紀朝臣鹿人の跡見の茂岡の松の樹の歌一首

茂岡に 神さび立ちて 栄えたる 千代松の木の 年の知らなく（六・九九〇）

水海に至りて遊覧する時に各懷を述べて作る歌

神さぶる 垂姫の崎 漕ぎ巡り 見れども飽かず いかに我せむ（十八・四〇四六）

右一首、田辺史福麻呂

これらによると、「神さぶ」は、行幸の地や旅先の地を讃える表現として用いられていて、「見れば貴く」、「尊く奇しく」、「木立繁しも」、「年深からし」、「高く貴き」、「栄えたる」といったものとはほぼ同じ内容で、「見れば悲しも」、「見れども飽かず」という感情を呼び起こす。ただ、讚美表現とすれば一一三〇歌の「見れば悲しも」は異例である。「見れば悲しも」を「感に堪えない」（新大系）と訳し、讚美性を持たせるものもあるが、「山を見てカナシという理由は不明」（全集）、「懐古の感情のせつなさか」（全注）などの見解もあり疑問である。あるいは本来的な「さぶ」の意味をもったものであろうか。

旅にある地でなく、自分が今居る地を讃える場合にも「神さぶ」は見えるが、以下はその例といえよう。

鴨君足人の香具山の歌一首 并せて短歌(反歌)

何時の間も 神さびけるか 香具山の 杵杉が末に 苔生すまでに(三・二五九)

越中国の歌四首

弥彦 おのれ神さび 青雲の たなびく日すら 小雨そほ降る 一に云ふ「あなに神さび」(十六・三八八三)

敬みて立山の賦に和する一首 并せて二絶

……天そり 高き立山 冬夏と 別くこともなく 白たへに 雪は降り置きて 古ゆ あり来にければ こごしかも 岩の神さび たまきはる 幾代経にけむ……

(十七・四〇〇三)

右、掾大伴宿祢池主和ふ。四月二十八日

京に入ること漸く近づき、悲情撥ひ難くして懷を述ぶる一首 并せて一絶

かき数ふ 二上山に 神さびて 立てる梅の木 本も枝も同じ常磐に はしきよし 我が背の君を 朝去らず 逢ひて言問ひ 夕されば 手携はりて…… (十七・四〇〇六)

右、大伴宿祢家持、掾大伴宿祢池主に贈る。四月三十日

二五九歌は、「鴨君足人の香具山の歌一首」の反歌二首中の一首であるが、この後に「或本の歌に云はく」(二六〇)があり、その左注の「右、今案ふるに、寧楽に遷都せる後に、旧りぬるを怜れびてこの歌を作るか」によれば都を離れての歌となる。が、この歌のあとに平城京遷都以前の歌も認められるから、藤原京での作ともいえ、旅にあるともさうでないとも言える歌である。「神さぶ」は香具山の杵杉の根本に苔が生すまでになった、莊嚴なさまを表現している。四〇〇三、四〇〇六歌は家持、池主が共に越中赴任中の歌で、赴任地でのものである。この時の二人の居住地は越中国であるから、今居る地を歌ったものと位置づけた。この場合も「神さぶ」は讃える語として用いられるのであり、「苔生すまでに」、「幾代経にけむ」、「常磐」という意味の讃美性を持つ。「青雲の たなびく日すら 小雨そほ降る」というのも、水の豊かさをあらわす讃美性によるものであろう。人麻呂の吉野讃歌における「神ながら 神さびせず」は、四二六〇〜四二六一歌の「大君は 神にしませば」を神話的世界を具現させ、吉野讃歌の讃辞表現として成立した。天皇や皇子の挽歌の「神さぶ」という表現にも同じような思想をみること

ができる。これらを土台に持統天皇による藤原京遷都までもない「藤原宮の御井の歌」によって「さぶ」は宮廷儀礼歌における讚美表現としての意義をもち、「神さぶ」が行幸や旅の歌で神として人を寄せ付けない勢いをそなえる語として広く土地讃めの表現として定着していった。

六、相聞歌の「神さぶ」

次の歌は、歌だけ見れば「神さぶにけり」は、「奈良路なる山斎の木立」を歌っているといえる。

君を思ふこと未だ尽きず、重ねて題す歌二首

君が行き 日長くなりぬ 奈良路なる 山斎の木立も 神

さぶにけり（五・八六七）

天平二年七月十日

天平二年、大伴旅人は太宰帥として太宰府にあった。旅人は太宰府滞在を「辺城に羈旅し、古旧を懐ひて志を傷ましめ、年矢停まらず、平生を憶ひて涙を落とすがとき……」（五・八六四前、吉田宣の書簡）と嘆く書簡を奈良の吉田連宣に送った。

八六七歌はそれに対して宣が旅人に送ってきた歌である。旅人が太宰帥となって任地に赴いてから年月が経ち、旅人邸の庭の木立が手入れもいき届かず茂っていることを「神さぶにけり」と歌っている。大伴宗家の庭が実際にそうになっていたかは疑問だが、人を寄せ付けない荒廃した庭を「神さぶにけり」と歌っている。また、この表現の中には、「君を思ふこと未だ尽き」ない宣の、旅人の帰京を待ちわびる心情もある。このように「神さぶ」にはある光景を歌いながら心情も歌いこむという場合がある。そのもっとも明確なものとして、「神さぶ」が恋情——相聞歌に用いられている例を挙げることができる。

「神さぶ」る状態は、恋情を歌う相聞歌では恋心の対極の状態にある。相聞歌における「神さぶ」が意味するところは多様であるが、「神さぶる恋」とはどのような恋をいうのであろうか。「老いを具象的にいったもの」（注釈四・七六二歌）、「人気なく年老いたことをいう」（釈注八・一六一二歌）、「老いたことをいふのであらう」（私注十・一九二七歌）、「年を取って物古くなつた」（全注釈十・一九二七歌）、「老いたことをいふのであらう」（私注十・一九二七歌）、「老いらくの恋」（釈注十一・二八六三歌）、「老いらくの恋」（集成十一・二四一七歌）、「老境に入り色恋などの俗事を脱却したかのようにみえることをいう」（新編全

集十一・二四一七歌)など、近年の注釈書では年老いての恋とする発言が多い。この相聞歌の「神さぶ」を年老いたとるのは、「神さぶ」に年数を経た、古色蒼然としたおもむきを感じさせるものがあることと巻四・五二二歌に対する代匠記の発言によつてのものであろう。契沖は、

神さふとは、此集にはおほくふるきことをいへり。わか年いとねびたれと、猶こひの心はふりせねは、あふことをいなどおもふにはあらず(初稿本)。

と述べている。この中の「ねび」は年をとつたのにふさわしい行動をする、いかにも年を取った様子をする事で、実際に年老いたという意ではない。そのあたりのことを考慮しながら相聞歌の「神さぶ」について見ていきたい。

相聞歌に「神さぶ」があらわれるのは既に柿本朝臣人麻呂歌集にみえる。まず、相聞歌の序詞中に「神さぶ」が歌われる人麻呂歌集と作者未詳の歌をみる。

物に寄せて思ひを陳ぶる

浅葉野に 立ち神さぶる 菅の根の ねもころ誰が故 我

が恋ひなくに

或本の歌に曰く「誰葉野に 立ちしなひたる」

(十二・二八六三)

物に寄せて思ひを陳ぶる

神さびて 巖に生ふる 松が根の 君が心は 忘れかねつ
も(十二・三〇四七)

二八六三歌は人麻呂歌集出のもので或本の歌には「菅の根」の形容として「神さぶ」はない。本文歌と或本歌との関係は定かでないが、「立ちしなひたる」と「立ち神さぶる」とにはどのような違いが認められるのであろうか。「……菅の根の」は「ねもころ(ねもころごろ)」を引き出す序詞として万葉集にはよく出てくる。人麻呂歌集の例ではすべて「物に寄せて思ひを陳ぶる」歌中に三首ある。二八六三歌のように「菅の根の」に何らかの形容表現があるものには、

見渡しの 三室の山の 巖菅 ねもころ我は 片思そする

一に云ふ「三諸の山の 岩小菅」(十一・二四七二)

がある。『三諸山之』という記し方からすると、人麻呂自身が

古体歌の別案として記したものは考え難い。……後代の人の記したものだろう」(全注)という指摘があるから、「一に云ふ」歌は人麻呂自身の別案歌とはいえないようである。人麻呂は「ねもころ」を引き出す菅を「見渡しの 三室の山の 巖菅」と歌う。「三室の山」は、三輪山のことも神の来臨するところをいうともされるが、信仰の対象として崇められてきた山の巖なしは神のいつく巖に生える菅を歌うことによつて、この菅は並々ならぬものであることを表している。二八六三歌の「立ちしなひたる 菅の根」と「立ち神さぶる 菅の根」にはそうした違いがあり、「菅の根」を「神さぶる」で形容することによつて、自分の恋が「神さぶる」ものであることを示していることになる。三〇四七歌は作者未詳歌である。「神さびて 巖に生ふる 松が根の」は不変なものとして「君が心」を引き出すのであろう。

次に序詞によつて「神さぶ」が引き出され、「神さぶ」る恋を歌うものについて考えたい。同じく人麻呂歌集出のものとして作者未詳歌をみる。

物に寄せて思ひを陳ぶる

石上 布留の神杉 神さぶる 恋をも我は さらにするか

も(十一・二四一七)

神に寄する

木綿掛けて 祭る三諸の 神さびて 斎ふにはあらず 人目多みこそ(七・一三七七)

問答

石上 布留の神杉 神びにし 我やさらさら 恋にあひにける(十・一九二七)

二四一七歌は人麻呂歌集、他の二首は作者未詳である。二四一七歌の「石上 布留の神杉」によつて引き出された「神さぶる恋」は、既に見たように老いらくの恋とするものが多い。「石上 布留の神杉」の年月を経た杉のイメージから年老いたの意とされるのだが、むしろ近寄り難い人を相手とした恋や久しく思っていた恋をいうのだろう。

一三七七歌は「譬喩の歌」に収められるもので、木綿を掛けて祭る三諸の神のように神らしく振る舞つて忌み慎んでいるのではありません、単に人目を気にしてのことで他意はないと訴えている。男性と逢うことができないのを、わたしがそうしているからではありません、と「神さびて 斎」っているのかとでも言ってきた相手に半ば挑戦的に言っている。

一九二七歌も同様な序詞で、この歌は一九二六歌と二首一対で問答形式になっている。

春山の あしびの花の 悪しからぬ 君にはしゑや 寄そ
るともよし(一九二六)

という問いかけに答えたものである。一九二六歌の序詞「春山の あしびの花の」は同音「悪し」を引き出し、悪く思っていない「君」には、ええい、ままよ、あなたとのことであれこれ言われてもかまいません、と歌っているのだが、序詞で春山に咲くあしびの花という美しい情景を歌っているながら反対の意の「悪し」を引き出し、序詞と本旨の間に落差を感じさせる表現である。また「しゑや」は捨て鉢な気持ちを発する語で、投げやりな言い方をするることによって戯歌的な性格を出している。これに対して、一九二七歌では恋に無縁に過ぎてきたわたしがいまさらながらこんな恋をしてしまったと、掛け合的に言い返したものであろう。恋する自分を「神さびにし我」と言うこと自体、戯れの気持ちのあらわれである。恋の歌における「神さぶ」は実際に年老いての恋というより、異性を寄せ付けずにいた自分を自嘲的に表現したものであろう。

こうして見ると、「神さぶ」る恋とは、近寄り難い人を相手とした恋、長い間逢うことのなかった恋をいい、それを自嘲やからかいの気持ちで歌ったものといえる。

作者判明歌の相聞歌の「神さぶ」をみていこう。これには序詞中に「神さぶ」が歌われるものはない。序詞によって「神さぶ」が引き出される例として、

京職藤原大夫、大伴郎女に贈る歌三首 卿諱を麻呂と

いふ

娘子らが 玉くしげなる 玉櫛の 神さびけむも 妹に逢
はずあれば(四・五二二)

がある。この歌は作者判明歌中、相聞歌に「神さぶ」が表れるもつとも古いもので、藤原麻呂が大伴坂上郎女に贈ったものである。麻呂が三首の歌を坂上郎女に贈り、坂上郎女は麻呂に四首の歌を贈っている。五二二歌に明確に対応する坂上郎女の歌はない。この贈答歌群は養老五年ころにとりかわされたものと考えられ、この時二人は二六才くらいであった。「娘子らが 玉くしげなる 玉櫛の」は「神さびけむ」の序詞で、麻呂は自分のことを娘の美しい櫛笄にしまつてある玉櫛のように「神さ

び」てしまっただろう、と歌っている。この「神さび」が年老いた意味であるとすれば、二六才ほどの年齢の者に対する表現としてはふさわしくない。あなたにしばらくお会いしていません、ということを誇張していったものであろう。

次の歌群は序詞をもたない歌である。

紀女郎、大伴宿祢家持に贈る歌二首

神さぶと 否にはあらず はたやはた かくして後に さ

ぶしけむかも（四・七六二）

石川賀係女郎の歌一首

神さぶと 否にはあらず 秋草の 結びし紐を 解くは悲

しも（八・一六一二）

七六二歌は紀女郎が家持に贈った二首の歌のうちの一首で、それらに対して家持は、

和ふる歌一首

百歳に 老い舌出でて よよむとも 我は厭はじ 恋は増

すとも（四・七六四）

という歌を贈っている。これらの歌は久邇京時代の歌の直前に配置されているところから、天平一一、一二年頃のものと推定できる。家持の和えた歌を見ると紀女郎が自分のことを年老いたと歌っていてそれに和したともとれるが、紀女郎の「神さぶと 否にはあらず」は、諸注で指摘するように卷七・一三七七歌の「木綿掛けて 祭る三諸の 神さびて 斎ふにはあらず」と類似し、特に年老いたことをいつているわけではない。この時の紀女郎の年齢は定かでないが、家持より年上だとしても実際に年老いたという年齢ではないだろう。「沈痾自哀文」中に「内教に云はく、『瞻浮州の人は寿百二十歳なり』と」とあり、「百二十歳」は、人間の寿命の限界で百歳は寿命に近い年齢を示す。家持は人間の寿命の限界である百歳を持ち出し、紀女郎のもう一首の歌「玉の緒を 沫緒に縊りて 結べらば ありて後にも 逢はざらめやも」（四・七六三）の「ありて後にも」を受けて、紀女郎への末長い恋を表明している。

一六一二歌は石川賀係女郎の歌であるが作歌事情は不明である。男性と逢うことを「神さぶ」から拒むのではありません、と別の理由を示すのは、前述の「木綿掛けて 祭る三諸の 神さびて 斎ふにはあらず 人目多みこそ」（七・一三七七）に通じる。この場合は「解かば悲しも」と自分が悲しい思いをする

から拒むのであって、その点今まで見てきた歌とは異質である。この歌の「神さぶ」は異性を寄せ付けないことをいうのである。

相聞歌の「神さぶ」に積極的に年老いたという意味を読み取ることはできないのではないだろうか。全注が「万葉集のカムサビという語の用例(二八例)を確かめてみても、人の老いることを直接カムサブと言った例は少ないと思われる」(十一・二四一七「注」と述べ、二四一七歌の「神さぶる恋」に対して「恋そのものが久しく以前からの恋」(二四一七「考」と述べるように、相聞歌の「神さぶ」、「神さぶる恋」、「神びにし我」が意味するのは年老いた我、年老いてからの恋というより、恋からしばらく遠のいていたこと、久しく続いていた恋をいうのではないだろうか。年老いたことを歌っているとれるものがある。契沖が「わか年いとねびたれ」というように、当人は現実には年老いてはいるわけではなく、戯れの気分による表現である。

おわりに

「さぶ」は古事記の「勝ちさび」が示すように、勝者が勢いに

乗じて荒々しく進む、という義を初源的なものとする。

「さぶ」は古事記、日本書紀に比べて万葉集に多くの用例をみ、歌語として多用されてきた。万葉集の「さぶ」は、動詞としてのものと接尾語としてのものがあるが、動詞「さぶ」は古事記の「勝ちさび」に通じる、すさびゆく心、荒涼感があり「さぶ」の初源的な意味が認められる。「さぶ」が「不_レ楽」(二・二一〇)「不_レ怜」(二・二二三)と表記されるものも動詞である。

これに対して接尾語としての「さぶ」は多様な意味を持ち、「さぶ」の義は広がりを持つようになる。「貴人」、「男」、「を」とめ、「翁」といった人に関わる語に接続する「さぶ」は、ますますその勢いがますます意味で用いられるが、これらはその状態を讃える表現として用いられる。この傾向は、「藤原宮の御井の歌」(二・五二〇五三)の「しみさび立てり」、「山さびいます」、「神さび立てり」の藤原宮讃美表現から認められる。「藤原宮の御井の歌」は左注に作者未詳とある。人麻呂を作者とする考えもあるが、作風などから人麻呂とは別人といわれる。歌に「さぶ」を詠みこんだ最初の歌人人麻呂は、古事記の「勝ちさび」に近い文字をもって表記したり、意味の上でも古事記の「さぶ」に近い使い方をしているが、「藤原宮の御井の歌」にみえるように、人麻呂とほぼ同時代に「さぶ」は新しい義になったことにな

る。が、人麻呂はすでに「神さぶ」という語で、「さぶ」に讃美性を持たせている。「神さぶ」は「主体の外面に主眼」をおき(根来麻子前掲論)、すぎまじいまでに神としてある様を表現し古事記の「さぶ」を受け継ぐものでもあるが、吉野行幸歌で「神ながら 神さびせず」と、神話的世界を具現させ、吉野讃歌の讃辞表現として確立した。それを土台に「神さぶ」は「藤原宮の御井の歌」によって宮廷儀礼歌における讃美表現としての意義をもち、人を寄せ付けない勢いを備える語として広く土地讃めの表現として定着していった。それが相聞歌で「神さぶ」と歌われると、近寄り難い人への恋、長い間思っていた恋、しばらく遠のいていた恋をあらわし、戯れさえも加味したものになっていく。古事記の「勝ちさび」に始まる「さぶ」は、万葉集で讃美表現として確立し、さらに相聞歌の恋のあり方に用いられるようになり、歌語として多用されてきたといえよう。

本文中に引く諸注釈書はつぎのように略した。

代匠記 万葉代匠記
全注釈 万葉集全注釈
私注 万葉集私注

注釈	万葉集注釈
全集	日本古典文学全集 万葉集
集成	新潮日本古典集成 万葉集
新編全集	新編日本古典文学全集 万葉集
新大系	新日本古典文学大系 万葉集
全注	万葉集全注
釈注	万葉集釈注

付記

本研究は、平成一七年度北海学園学術研究助成によるものである。記して謝する。